

子どもの発達障害(特性)の理解と支援

～その子らしさを活かすために～

成長(growth)と発達(development)

私は小児科医ですので、いつも診療の中で子どもの成長と発達について考えています。**成長とは「身体が大きくなること」**です。一方、**発達とは「できるようになること」**です。子どもは発達段階を飛び越えることなく階段を一段一段上るように発達します。発達は量ではなく、質で見ないといけないと思っています。また、その人の能力を発揮するために、**遺伝素因**、学習・経験ができる**環境素因**、楽しい・面白いと思う**モチベーション**の3つが大切だと思います。

発達障害(神経発達症)の考え方

発達障害は特別なものではありません。スペクトラムの考え方は連続体なので、どこからどこまでが正常というものでもありません。『個性か、障害か』分ける線引きは何か』と考えた時に、私は**社会適応**だと思っています。ここでいう「社会」は、子どもの場合、保育園、学校、家庭などのことです。本人は変わっていません。A先生の時は「発達障害」、B先生になったら「個性」とされる子もいます。周囲が変わることで、線引きも変わっていきます。



※本田先生の資料を参考に作成

相手がどういう気持ちだったか、自分が行動したことで次に何が起るか**イメージ**することが**苦手**。こだわりや秩序性が高く、黒か白かはっきりしてほしい。

例：電車でのマナーを教える場合

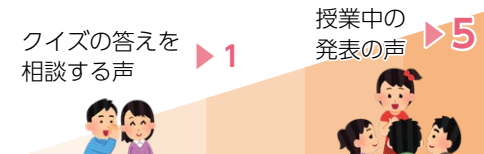
席を譲る人・譲られる人・譲らない人・周りで見ていて人の表情や気持ちについて話し合う。状況や他者の気持ちを言語化して伝え、どうしたらよいのかを丁寧に教える。



注意・衝動・動き・感情などに関して、**コントロール**することが**苦手**。自分の行動や状態を振り返って、行動を修正することも**苦手**。

例：声の大きさのコントロールが苦手な場合

場面に合わせた声の大きさを可視化して、パターンを練習する。



自分の体がどれくらいの大きさで、どれくらいの力でどうやって動くのか把握してコントロールをする**ボディイメージの問題**。手先の使い方や、追視などの目の使い方が不器用。

講師 本田 真美 氏(あのねこどもクリニック院長)

プロフィール

東京慈恵会医科大学卒業。医学博士。小児科専門医。国立小児病院にて研修後、国立成育医療研究センター、都立多摩療育園、都立東部療育センター、みくりキッズクリニック院長を経て、2024年9月にあのねこどもクリニックを開院。
著書／認知特性タイプを知って隠れた「得意」を掘り起こす！子どもの『ほんとうの才能』を最大限に伸ばす方法(河出書房新社,2024) など



0歳から20歳は人生のもっとも大切な礎 ～行動や精神的な問題の背景と年代別の対応～

問題の背景	年代別の対応
本来の資質 <ul style="list-style-type: none">●感覚過敏・運動発達●言語的／非言語的コミュニケーションの状況●イメージーションの弱さ●注意集中の問題	→ 乳幼児期の対応のポイント 子どもからの発信を大人がキャッチして対応し、コミュニケーションをとる。
養育・教育環境 親と子どもの相互の関係性 学習環境 <ul style="list-style-type: none">●大人との安心できる関係性●子どもにあった環境の検討●問題行動の背景への理解●未学習、不足学習、誤学習	→ 幼児期の対応のポイント <ul style="list-style-type: none">●子どもが大人に守ってもらったことで不安が解消され、安心感を得られた経験が積める環境をつくる。探索活動にチャレンジする力を育てる。●適切な教育を受けたり、ソーシャルスキルを身に付けたりするための環境の検討。(例) 就学相談の利用
社会との関係性 <ul style="list-style-type: none">●先生、友達、集団との相性●アイデンティティを作る●学習内容の複雑化(具体的→抽象的)●人それぞれに異なる認知スタイルによる論理的思考	→ 学童期の対応のポイント～9歳は学習や思考の転換期～ <ul style="list-style-type: none">●小3(9歳)～の学習内容の変化(話しことば→書きことば、暗記→理論、社会・理科・習字などが始まる)に対応するために視る力を育てる。 ※視る力：対象を見て、形を認識して、体をイメージ通りに動かす力●認知スタイルにあった伝え方をする。 (伝え方の例) AとBとCの関係性を説明する場合 ・物事を段階的に理解するタイプ「AしてBすると、Cになるよ」 ・全体を捉えてから理解するタイプ「Cができるために、AしてBするよ」
さまざまなイベント <ul style="list-style-type: none">●学校行事や人間関係のトラブル●ネットやゲーム依存などの社会問題	→ 思春期の対応のポイント 生活環境、友人関係、反社会的行動などは、 特性への対応だけでは解決することが難しい 。親が変わっていかないと、子どもが変わらない場合もある。

その子らしく生きていくために整えてあげたい4つの力

自己肯定感	ありのままの自分を肯定すること
レジリエンス	困難が起こった時にしなやかに対処する力
コーピングスキル	怒りへの対応能力や自分の疲れに気づいて対処する力
セルフアドボカシー	何に困っていて何のヘルプが必要か社会にお願いする力



最後に

子どもと家族を支えるのが教育と医療と福祉です。医療における診断は、レッテルを貼るためのものではありません。**子どもの特性や得意不得意を理解することで、周囲が子どものことを分かり、必要な支援が適切に選択されることで、子どもが生活しやすくなるため**に行います。医療的な介入をする時は、①早期介入による二次障害の予防をすること、②学んだり、育ったりする機会を逸しないこと、③利用できる支援(教育・療育・手帳など)を適切に使えるようにすることの3点を意識しています。

世田谷区の医療機関として、地域との連携をしっかりととりながら、お子さんやご家族が「安心して住める世田谷区」になるように頑張っていきますので、引き続き、応援をよろしくお願いいたします。